

平成 29 年度2学期終業式講話

校長 岩田 学

2学期の始業式に、「俊足長坂を思う」という論語の一節を紹介し、険しい上り坂を前にすると、目を輝かせて走り出す優れた馬のように、前向きな生活をしてほしいという話をしました。夏休みの全国高校総体、宮城総文祭に始まり、実りの秋に行われた各種大会、コンテストでは、篠ノ井高校らしい破竹の勢いを世に示すことができました。授業はもちろんですが、クラブ活動・生徒会活動を含む全てが大切な高校生の学びの場であり、大変喜ばしいことです。長い2学期を通して本当によく頑張った。

さて、暦の上で大雪を過ぎる頃から、木々もあらかた葉を落とし、いよいよ厳しい冬の到来を身近に感じるようになりました。師走の日々は忙しく年の瀬に向かいますが、この一年、学生の本分である、「勉強」はどうでしたか。一人ひとりがしっかりと振り返り、成果を新年に繋げたい。

今日は、学習について皆さんに二つの事柄を考えて欲しいと思います。

まず、思考力・判断力・表現力重視の学力観に立ち、主体的な学びの姿勢を評価する教育への変化が加速していることです。この方向性の根本には、大学教育のグローバル化があります。世界からの留学生を多く受け入れるようになった日本の大学では、2010年頃から授業をアクティブラーニングや反転学習といった、世界基準の内容に改革して来ました。その中では、「主体的に他者と協働する学習と研究」が展開されるのですが、多くの場面で、日本人学生が活動の中心になれないという現実がつまびらかになって来たのです。日本の学校の授業を、教員から生徒への知識伝授型から、双方向型の“半学半教”スタイルに変革しなければ、「日本の若者は世界からどんどん取り残されてしまうだろう」という大学関係者の危機感が、高大接続改革や、大学入試の「新テストへの移行」という流れを作っているのです。入試を課す大学側の主張ですので、この改革は加速度的に進みます。覚悟して主体的に学びたい。

もう一つは、家庭学習です。少子化による大学入試倍率の低下に比例して、家庭学習時間の減少が止まらず、高校生は一般的に勉強しなくなっていると言われていています。昔から英数国は主要教科と扱っていましたが、中でも学習困難とされる英語・数学さえ予習しない生徒が現れてきました。長野県教育委員会の調査においても、平成に入り家庭学習時間は減少を続け、最新のデータでは、6割近い生徒が平日30分以内とほとんど家庭学習をせず、また3時間を越す生徒は、僅か8%程度となっています。昭和63年の統計では、平日の家庭学習時間は、平均で約2時間、3時間を越す生徒が20%でした。およそ30年前、皆さんの親の年代が高校生の頃のことです。学習においては、ある一定の量をこなすことからしか質は生まれません。家庭学習について見直す機会としたい。

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず。」と、人間の同等なることを教えた福沢諭吉は、「学問のすすめ」の結論で、「賢人と愚人の区別は、学ぶと学ばざるとによりてできるものなり」と書いています。「すべからく人は同等の人権を有するが、学問への姿勢において優劣の区別はつけるべきだ。」というのが福沢の教えです。

人生を生きる上で、知ること、学ぶことは不可欠なことです。多くの先人や書物に学びながら努力を続けていくこと。それが私達の人生に彩を与えてくれます。私たちは、自分の人生を全力で生き、未来の希望の実現に向かって心を込めて勉強し、心も身体も日々新たになるように歩んで行きたい。

とりわけ、大学入試センターテストを目の前にしている3年生諸君には、全力を勉強に懸けてやり切ってほしい。心から応援しています。